

令和7年度第1回甲賀市スポーツ推進審議会 概要報告

1. 開催日時 令和7年8月8日（金）午後7時30分から午後9時00分まで
2. 開催場所 甲賀市役所 4階 教育委員会室
3. 出席者 委員 小澤委員、山崎委員、福井委員、倉谷委員、村上委員、水野委員、
四谷委員、圖司委員
以上8名
事務局 立岡教育長、教育委員会事務局 理事 福井、
社会教育スポーツ課 課長 林、課長補佐 森地、係長 藤谷、
社会体育指導員 中村
4. 傍聴者 なし
5. 会議次第 *報告事項
・甲賀市スポーツ推進計画の進捗状況について
*意見交換
・甲賀市スポーツ推進計画の令和8年度から令和10年度までの重点施策について
6. 配布資料 ・甲賀市スポーツ推進計画
・令和5年度から令和7年度までの重点施策
・資料1 甲賀市スポーツ推進計画の進捗状況について
・資料2 スポーツ振興のための重点施策について

7. 議事の概要

○報告事項 甲賀市スポーツ推進計画の進捗状況について

委員 「子どもの体力向上とスポーツ活動の推進」に関して、部活動の地域移行の進捗状況や充実具合などを教えてほしい。

事務局 今の部活動をすぐに地域に移行してしまうのではなく、まずは地域の方々の協力を増やす地域連携を進めながら、地域移行に向けた方向性を見つけ出していくよう取り組んでいる。昨年度は、部活動指導員が6名であったが、今年は14名の地域の方に指導いただいている。さらに来年は指導者の数を増やしていきながら、地域にお願いする方向に進めていけたらと思う。

委員 子どもがしたいスポーツがそれなりにできているのか、指導者がいないからできないなど、状況はいかがか。

事務局 中学校の状況をすべて理解しているわけではないが、子どもたちに何のスポーツがしたいのか問うて進めているわけではなく、今ある部活動でどの活動がしたいのかという聞き取りをしている。ただし、教育委員会のアンケートの中では、その学校にどうしてもしたい部活

動がないという生徒もおられる。そのため、少人数でもほかの学校と組んで進めていける合同部活動に取り組んだが解決できなかった。令和7年度からは、実際に自分のしたい競技のある学校に行っても構わないという拠点校方式としたが、城山中学校の生徒1名が水口中学校に練習に行っているのみであり、サッカーや吹奏楽では、希望する生徒がいなかった。

委員 なかなか難しく、完ぺきではない感じがする。改良の余地があるということなので、引き続きお願いしたい。

会長 余談になるが、各都道府県によっても考え方が違う。例えば兵庫県神戸市では完全展開をされているが、全中の駅伝の際、通常上位の兵庫県が下位になっており、指導者が熱心にやれていないように感じた。一方で同県の小野市ではそうしたことはしないと聞いた。一つの県でも考え方が全然違うが、国はやると言い切っている。

○意見交換 甲賀市スポーツ推進計画の令和8年度から令和10年度までの重点施策について

会長 委員それぞれのお立場で、日ごろの活動、取り組みを顧みていただき、ご意見をお願いしたい。

委員 「スポーツ指導者の育成・資質向上」において、スポーツ傷害の予防について記載がある。「指導倫理・安全管理をはじめ」という表現で問題ないと思う。

委員 小学校では、授業内容を充実させていこうという方向で研究を進めている。令和10年度には近畿の体育の発表が滋賀県で行われることになっており、それに向けて今年度から研究を始め、特に子どもの体力向上や授業の充実を図る準備をしている。私たちが最も悩んでいるのは暑さであり、WBGTが上がると長休みや昼休みが暑すぎて外で遊べないという問題がある。実際にプールも暑さのため使用できず、体育館でも活動できない状況である。その中で、子どもの体力向上や継続的な運動をどのように実現するかを考えていかなければならない。また、学校と地域の連携という点では、綾野小学校の場合、水口高校の体育コースとの交流を行っている。さらに、CS（コミュニティ・スクール）によって、1時間目までの時間に地域の方に来ていただき見守りをお願いしたり、地域にいる元高校体育教員に高学年の器械運動を指導してもらったりするなど、地域の方々に協力をいただいている。こうした中で、地域の人材発掘という考え方も重要になってくると感じている。学校と地域の連携は大切であると強く実感している。

会長 異常な暑さで、命や健康を守るために外での活動が難しい時代であるが、子どもたちがこの環境で生きていかなければならないので、たくましさや環境への順応、耐える精神力などが必要であり、なかなか難しいと思う。

委員 健康福祉部では健康づくりの計画を立てており、健康寿命の延伸のためには身体活動やスポーツが重要な柱となっている。現在の健康づくりの考え方には、ライフステージごとの取り組みではなく、ライフコースアプローチというものがある。これは、生まれてから死ぬまでを一連の流れとして捉え、これまでの生活習慣がその後の健康状態に影響し、また現在の健康状態や過ごし方が次の年代の健康状態に影響するという考え方である。「スポーツを無理なく日常に取り入れる仕組み」は、どの年代でも継続できることが重要であるため、案の通り記載すべきだと考える。環境が整っていると健康度が向上するというデータもあり、世代交流や地域交流を推進することは非常に重要である。そうした機運が高まることで健康につながるというデータもあるため、世代交流の促進を図るべきだと考える。

委員 「子どもの体力向上とスポーツ活動の推進」について、幼児期の子どもに関しては、スポーツというよりも運動遊びという言葉が適している。ここ数年、運動能力調査を行っているが、その結果は年々低下している。日常的に運動遊びをしたり、家庭で保護者と一緒に体を動かしたりすることが難しい状況もある。日々の保育の中での散歩をはじめ、保育室でのキッズヨガの実施や、室内で活動できる遊具の導入、リズム活動など、子どもが自ら体を動かしたくなるような工夫をしている。食事中に姿勢がすぐ崩れる子や、すぐに足を組む子もおり、日常的に体幹がどの程度育っているのか心配になることもある。日々の遊びを通して、子どもたちが発達段階に応じて十分に体を動かせる環境を整えるよう取り組んでいる。

委員 障がい者スポーツについては、国スポ・障スポ大会のレガシーこそ最も大事にしていきたい。そのためには、まず一般の人々に向けた普及活動を行い、障がい者スポーツがどういうものかを理解してもらう必要がある。その第一歩としては、楽しむことができるスポーツが不可欠であり、フェスタなど気軽に参加できるイベントに取り組んでいる。加えて、障スポ大会のように競技として取り組む人も多くいるため、スポーツ大会と競技大会を同時に開催している。「障がい者スポーツ活動の推進」では「交流を通じて障がい者への理解を深める」としているが、東京パラリンピックのレガシーとして障がい者スポーツの理解は進んでいる。今後は、理解にとどまらず、お互いを認め合う共生社会の実現こそがレガシーになると考えている。そのためには、一緒にスポーツを行う機会が必要である。競技スポーツの面では、障がい者は指導者や練習場所、資金の面で恵まれない状況で活動してきた。しかし、例えば卓球では、粘り強く指導を重ねれば、障がい者であっても健常者と同じように理解力も高まり、身体もよく動くようになる。こうした部分をお互いに認め合いながら、一緒に競技し、一緒に楽しむことが重要である。卓球は特に一般と障がい者との垣根が低く、全日本選手権の滋賀県予選を突破して本大会に出場した選手もいる。このような事例から、「自分も何かできる」「一緒にこのスポーツをやってみよう」という雰囲気生まれることを期待している。国スポ・障スポのレガシーとして、共生社会の実現に向け、健常者と障がい者が共にスポーツを楽しめる環境を整えることが必要である。

会長 令和7年度までは障がい者への理解を深めるという施策であったが、令和8年度以降は、理解というよりお互いに認め合う方向で見直しが必要であるといったご指摘をいただいたと思う。事務局としてはどうか。

事務局 今のご意見をもとに見直しをさせていただきたい。

委員 「共生社会の実現」を入れていただくといいと思う。法改正の基本理念のところに記載がある。スポーツを通じた共生社会の実現というのは大きな目標である。

会長 今ご指摘のあったところを事務局で検討いただきたい。

委員 スポーツ少年団では、4月に市内の幼稚園、小学校、中学校に広報紙を約6千部配布している。各団の紹介もしているが、地域を限定せず、好きな競技があればそこに参加できるようにしており、社会教育スポーツ課を通じて体験に来てもらっている。子どもたちはスポーツの入り口をどこかで見つけようとしており、家族も一緒に関わっている。スポーツ少年団は、子どもたちがスポーツを始めるきっかけをつくる場であると考えている。6年生で終わりにせず、東近江市では中学校に進学しても活動できるよう、地域移行に合わせた組織をつくっている。このような取り組みができればと思っている。部活動の地域移行も少しずつ進めているが、中学生に見合った指導者の確保など難しい部分もある。取り組みの内容が分かりや

すく伝わるよう工夫していきたいと考えている。指導者の資質向上については、年1回の指導者研修会を実施しており、滋賀県でも開催されるので、どちらかには必ず参加できるようにしている。自分がスポーツをしているからといって指導できるわけではなく、スポーツ少年団では資格がなければ指導できない。大切な子どもたちを預かる以上、資格なしでは教えられると伝えている。また、アクティブチャイルドプログラム（ACP）という子ども向け運動プログラムがある。小学生にも体験いただいているが、甲賀市スポーツ少年団では幼稚園児を対象に年2回、親子運動遊びとして実施している。ご家族の中にもスポーツをしたという人は多く、生涯スポーツにつながれば良いと考えている。7月に水口体育館で開催した際は、約70組が参加され、気に入って繰り返し参加される方もおられる。ACPについては、私が県の普及委員を務めているため、県から依頼のあった場所に出向いて学ばせてもらっている。イベント後半は体験会を行い、さまざまな競技を体験してもらって、自分の子どもに何が合うかを知るきっかけにもらっている。現代では共働きの家庭が多く、スポーツ少年団に子どもを預けることにハードルがある。送り迎えや当番の問題もあるが、その点については時代とともに方向性を変えていく必要がある。指導者でできることは積極的に行うようにしている。甲賀市の将来を担う子どもたちが健やかに育っていくことは重要であり、スポーツだけでなく幅広い経験をしてほしいと考えている。9月には和歌山県へ連れていき、他県の子どもたちと2泊3日の交流活動を行う予定である。知らない子どもたちとの交流は、自分たちの力になると考えている。できることは積極的に行い、より良い甲賀市を盛り上げられる組織でありたい。

委員 生涯スポーツの推進については、総合型地域スポーツクラブで実施しており、分析を行いながら取り組んでいる。健康推進員や健康福祉部とも連携し、BIWA-TEKUなどのアプリを活用するなど、デジタルを使った取り組みもすでに進めている。しかし、現段階では成果としてまだ表れていないため、甲賀市民にとってどのような形が最良かを検討する必要がある。全国的な情報もあるが、甲賀市は大都市とは異なるため、地域の実情に沿った形で考えたい。障がい者理解については、市民の意識はまだ成熟していないことが、アンケートや保護者への聞き取りから分かっている。東京パラリンピック以降、理解は進んでいるものの、本市では十分とはいえない状況である。そのため、引き続き普及活動や周知活動を行い、共生社会の実現を目指すべきである。そのために、どのようなプログラムを組むべきかを、総合型クラブやスポーツ推進委員で検討していきたい。子どもの体力については、滋賀県が作成した幼児期向け運動プログラム「PIC」があり、子どもに必要な36の動きが含まれている。甲賀市の幼稚園や保育園ではまだ導入していないが、米原市や長浜市では成果を上げており、その検証を踏まえて本市でも導入を進めたい。学校については、CSの関係でボランティアによる地域展開は非常に有効だと考える。特に運動やスポーツの得意な人と地域連携することで、将来の部活動移行にも役立つ。外部指導者は増えているが、20以上あるスポーツ部活動にどのような手当を行うかは財源の課題がある。子どもたちのニーズには応えたいが、すべてに対応するのは困難であり、財源と地域指導者の関係が今後の課題といえる。地域スポーツの推進については、スポーツ協会、スポーツ少年団、甲賀市パラスポーツ協会などとの指導者交流を進め、地域ネットワークを強化する必要がある。交流が進まなければ、運営人材の発掘・拡大にはつながらないと考え。競技スポーツはスポーツ協会の専門分野だが、指導者の資質向上を図りつつ、連携して指導できる体制が必要である。体制整備は重要であ

り、指導者の資質向上だけでなく、参加者の意向、つまりマーケティングの観点も見直さなければならぬ。良いプログラムでも、参加者がいなければ意味がない。スポーツ環境については、中学校の体育館にはすべて空調設備が導入されたが、水口体育館以外の社会体育施設にはない。避難所としての利用も考えると、教育委員会の所管ではないかもしれないが、設備の充実により地域住民がより身近な施設で運動できる環境が整うため、令和8年度以降も整備を続けてほしい。いずれにせよ、スポーツ推進委員と総合型地域スポーツクラブに関しては、ここに挙げた施策にはすべて着手しているものの、まだ結果が出ていないため評価はできない。今後も継続的に取り組み、その成果を報告できるよう努めたい。

会長 私からはスポーツ協会について、全般的な話をする。この4～5年は、市民の新たなニーズに合った事業を進めてきた。その一つがウォーキング事業である。誰でも気軽に体を動かせるということで、水口スポーツの森を拠点にウォーキング教室を展開してきた。また、趣向を変えてゴルフ場を歩く企画など、さまざまな取り組みも行ってきた。アクティブウォークというテーマで、より積極的に、科学的に、またフォームなどについても指導してきたが、3回ほど参加されると4回目は来られなくなる傾向がある。1～2回参加されれば、自分の好きな時に歩ければよいというのが、多くの人のニーズであると感じている。例えば、水口スポーツの森の裏手を整備すれば、四季折々の景色を楽しみながら歩ける環境になるだろう。もちろん、今後も継続的に教室は開いていくつもりだが、自ら歩く習慣を持つことが発展的には必要だと感じている。こうした取り組みを進めてきた一方で、加盟団体の本来の充実、育成、支援といった面がややおろそかになった感もある。どの団体でもそうだが、高齢化や指導者不足が進んでおり、それぞれ専門の競技団体が23あるものの、新しい人材がなかなか入ってこないのが現状である。本来は力を入れて、共に頑張りながら支援し、競技団体が充実して各分野で活躍してもらえれば、大きな力になるはずだ。国スポ・障スポが終わったら、この課題に本格的に向き合う必要があると考えている。そのような中、現在スポーツ協会とスポーツ振興財団との統合の話が進んでいる。しかし、今後どうなっていくのか、協会としても先が見通せない状況である。だからこそ、市の支援を心からお願いしたい。

委員 スポーツ環境の充実ということで、教えてほしいが、異常な暑さにより外でのスポーツが危険という状況であるが、水口体育館以外の社会体育施設には空調がない。スポーツ環境の整備というのは、こういった部分も含んでの話になっているのか。また、学校の体育館もどれだけ空調設備が整備されているか分かれば教えていただきたい。高校野球でも、これだけ暑いと炎天下の時間は中断し、2部制という形になっている。この暑さは将来的に続くという専門家の意見もあるので、これからスポーツをやっていくためには、空調設備が必須になってくると思う。その辺りも考えを聞かせていただきたい。

事務局 スポーツ施設の修繕、改修等については、計画を策定しており、それに沿って実施するということになっている。空調設備についてはかなり経費がかかる工事になるため、長寿命化を行うような大きな改修を行う際に、順次整備していくということになる。ただし、例えば毎年1施設はできるかと言えば、それは難しいような状態である。学校施設については、中学校の方には空調設備が一定整備されており、今年度は水口中学校の格技場と甲賀中学校体育館に空調設備が導入されると聞いている。小学校については改修計画について把握できていないが、今のところ設備はない。

事務局 補足をさせていただきたい。避難所等には空調設備を設置する必要があるが、財源的なも

のがかなりかかるということで、まずは部活動がある中学校から整備した。社会体育施設についても、中学校の部活動でも使っていただいているところもあるため、そうしたことも視野に入れながら予算の関係もあるため、順次整備を検討していきたいと考えている。また、熱中症の関係で競技団体でも工夫をされており、屋外競技では、野球の場合であれば5回にクーリングタイムを取っておられる。競技団体が大会を開催される場合にはWBGTを試合前に計測し、35以上であれば中止する、31以上であれば利用方法を考えるなど競技団体の方でも工夫をされているので、そうしたところでもご協力をいただきながら安全に活動いただければと考えている。

委員 経費がかかるのは分かっているが、事故が起こると怖い。そこが一番懸念するところである。

会長 空調設備のある施設を少しずつ開放していくことで地域展開にもつながるといいと思う。すぐには難しい、大きな課題であると思う。

委員 今、甲子園に出ている京都国際の西村君は地元出身だと思う。

事務局 京都国際の西村君のほか、城山中学校からも1人が京都国際に、甲南中学校からは1人が綾羽に行かれている。野球に限らず、甲賀市内の優秀な選手が県外で頑張っておられるという状況である。

委員 本当に実力のある選手は市外に行ってしまう。市内に残り、ここで生活していただければいいが、今のような議論の中で、本市のスポーツ環境が整っていないことが影響しているようにも思う。市外に出たいと言って、綾羽とか京都国際とかに行かれるということは、市は人材育成と言っているのに、放出しているように思える。

事務局 まさにそのようなところで、滋賀県では県外から来られていることもある。その辺りはなかなか難しいところで、冒頭に教育長からご紹介した倉田選手も中3なので、高校となればいろんなところが目をつけて引っ張る手が多くあると思う。そうしたときに県内で甲子園を目指すというところに行っていただければいいが、本人も活躍したいところを選ばれると思うので、そうした魅力ある学校が近くにできるといいと思う。

事務局 倉田君はご両親と市長を表敬訪問していただいた。その際、甲賀スタジアムで練習をさせてもらって、そこのスタッフにもいろいろ協力いただいてとてもありがたいということであり、環境についても感謝していると本人もご家族もおっしゃっていた。

教育長 バasketボールでも去年紹介していただいたが、京都精華で全国優勝している選手がおられる。

委員 全国区の選手であったが、けがをされ、優勝できなかった。

委員 甲賀市のスポーツの方向性を定めるにあたっては、他市のいいところを参考にする方法もあるが、自分のところの足元をよく見て、いい選手が流出しないように、いい選手が寄ってくるような環境づくりを考えるということも一つの手段だと思う。

○閉会

以上